卒業論文

星野源の感性の社会学的考察

2016 年度入学
九州大学　文学部　人文学科　人間科学コース
社会学・地域福祉社会学専門分野

2020 年 1 月　提出

要約

本論文は、星野源の、特に音楽活動を社会学的に考察するものである。

この研究の目的は、人間の感性がどう育まれ、他者の感性にどう影響を与えるか、それが、どう社会へ影響を与えていくかを解き明かすというものである。

2045 年問題という、人間にとって乗り越えるべき難題を多く含みうる局面が刻一刻と迫っている状況に瀕して、人間の知能を上回る人工知能と人間が、うまく共存していくために、私たちは、準備をしていかなければならない。また、私が、大学にする少し前に、大学の文系学部縮小問題があり、文系学部の存在意義や学ぶということについて、考えを深めなくてはならないと考えた。そこで、これら問題にうまく対処していくために、重要視されるべきなのは人間の感性であると仮説を立て、この研究を設定した。

この論文では、人間の感性を表現の源泉と定義し、調査・分析を行う。調査対象としては、日本で表現者として、実績があり、表現者として活動の幅が広く、この数年で優れた表現者としてのより評価されることの多い、星野源を選定とし、星野の著作物や星野に関する雑誌のインタビュー記録、メディアを元に考察・分析を行った。

結果として、星野源は、生まれたときから無意識的にも、音楽が常に周りに存在するという環境があった。そして、星野が影響を受けた、音楽にとどまらない幅広い範囲の物事を、星野自身の感覚に合うまで、繰り返し音楽を聴き続けたり、映像作品を観続けたりしながら、研究・分析することができている。また、それを、他者と共有できる楽器での演奏や言葉による表現に落とし込むことができるまで血肉化させることができた、ということが得られた。

これらの結果を分析し、感性進化論、感性エデュテイメントという二つの論を提示する。感性進化論は、これまで、先人が積み重ねてきた感性を、次の世代に受け継ぐことができるということである。感性エデュテイメントとは、感性がエンターテイメントとして表現／受容されるだけで、教育し／されることができるということである。

この分析結果から、進歩していく社会が私たち人間にとって豊かであるためには、それを実現のための土台となる考えを築く大学の文系学部の存在が必要であり、科学技術と感性とが均衡のとれた発展が達成され続けることが、未知の問題への対処法であるという結論が得られた。

目次

1　はじめに
2　準備
2.1　感性の定義
2.2　調査対象の選定
3　星野源の感性の調査と分析
3.1　星野源の歴史と星野源の感性をつくったもの
3.1.1.1　幼少期から小学生まで
3.1.1.2　中学、高校時代
3.1.1.3　上京からデビューまで
3.1.2　星野源の感性に大きく影響を与えたもの
3.1.2.1　細野晴臣
3.2　星野源の音楽作品に込められた感性
3.2.1　楽曲制作に対する姿勢
3.2.2　楽曲制作
3.2.2.1　『ばかのうた』と『エピソード』
3.2.2.1.1　『ばかのうた』
3.2.2.1.2　『エピソード』
3.2.2.2　『Stanger』
3.2.2.3　『YELLOW DANCER』
3.2.2.4　『POP VIRUS』
3.3　星野源の音楽作品が人々の感性に与えてきたもの
4　結論
4.1　感性進化論
4.2　感性エデュテイメント
4.3　社会は感性によってどう変わるか
文献
謝辞
付録